

書道研究誌

書道の光

9
2024



Vol.673
宮城野書道会

秋思 許渾

琪樹西風枕篔簹秋

琪樹きじゆの西風せいふう枕篔簹ちんてんの秋

楚雲湘水憶同遊

楚雲そうん湘水しょうすい同遊どうゆうを憶おもう

高歌一曲掩明鏡

高歌こうか一曲いつきょく明鏡めいけい掩おほう

昨日少年今白頭

昨日けふの少年しょうねん今は白頭はくとう

美しい庭の樹木に秋風が立ち、枕や竹の筵も秋の気配が冷ややかに感じられ、昔、楚山の雲の下や、湘江のほとりで遊んだ友人らを思い出す。声高らかに一曲歌ってみたが、自らの姿が嫌になり鏡を覆い隠す、見れば、昨日の少年が白髪になっているから。

《琪樹》美しい樹木。琪は美玉をいう。

《西風》秋風。

《枕篔》枕と竹で編んだ敷物。

《楚雲》楚国の空の雲。

《湘水》湘江。湘は湖南省の別名で洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川。

《同遊》ともに遊んだ友人。

《明鏡》曇りのない鏡。

清秋や錦秋そして秋麗などと形容される豊穡の秋。その一方で、冬へ向かう衰退の象徴とも取れる秋は詩の素材として好まれ、「悲秋文学」として中国文学の大きな主題の一つです。この詩は、許渾が秋を迎えて自分の老いを嘆じた詩です。

作者の許渾（七九一〜八五四）は晩唐の詩人です。若い頃から病弱で苦学の末、四十一歳で進士となりました。左遷や免職も経験しましたが、自然を愛好し晩年は潤州（現在の江蘇省鎮江市）の川のほとりに隠棲しました。

「西風」は春の風を指す東風とは対照的に秋風を言います。美しい庭の樹木に秋風が立ち、夏物の枕と敷物などの寝具も肌寒くなって、秋の訪れを感じます。

「楚雲」楚は湖北省・湖南省一帯を指します。また楚の襄王が巫山の神女と遊んだ「巫山雲雨」の故事を念頭に読み込んでいます。また「湘水」は湘江のことで、洞庭湖に注ぐ湖南省最大の川です。春秋時代の聖天子舜王が病没し、これを悲しんだ二人の妃が身投げして水神となった伝説があります。許渾はロマンチックな神仙思想に耽った青年時代を「楚雲湘水」と表現して共に遊んだ友人を懐かしみます。

そして声高らかに歌おうとしましたが、鏡に映った年老いた自分の姿を見て、鏡に蓋をしてみます。終句の「昨日の少年今は白頭」解説の要らない明解な一句です。

秋を迎えて自分の老いと重ね合わせる手法は、「白髮三千丈……」で有名な李白の「秋浦の歌」も同様です。また魏の詩人阮籍（二一〇〜二六三）の「詠懷詩十七首其五」に「朝爲媚少年、夕暮成醜老（朝には媚少年たるも、夕暮には醜老と成なる）」とあります。

今夏のような猛暑はもう懲り懲りですが、我々も秋風が吹き肌寒くなる何となく寂しさを感じ感傷的になります。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）

閑眠白晝三杯醉
 動青杉一曲琴

同人 佐々木 迫水



同人 和泉 溪石

分には非ざるの福 故無きのの夜は造物の釣針に
 非まは即ち人世の機陣分此の処に眼を著ると
 高きればは術中にてはと解

准同人 千葉 華泉

東得花 夜以風
 作枕老 紅袖女
 曲屏深 酒滿城
 閑曲多 金楊柳
 夢燈暗 情憶憶
 無人枕 結草
 賜少 素錦
 菊枕 春如
 偏枕 春之
 蝶出 人向
 萬分 酒
 香似 舊
 難沈 夢

同人 熊谷 彩雲

身休の被書や心下を向て子供は増えし昨日
 墨空を見上げ夢を遺りては心願う星は
 金之入道は分隔はく夢は是世輝 若望之を眼に

同人 菅原 紫雲

宿昔青雲志蹉跎白髮年誰
 知明鏡裏形影自相憐

同人 佐藤 朴峯

同人 渡辺 無象

此の書は、渡辺無象の書である。内容は、
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、
 二十一、
 二十二、
 二十三、
 二十四、
 二十五、
 二十六、
 二十七、
 二十八、
 二十九、
 三十、
 三十一、
 三十二、
 三十三、
 三十四、
 三十五、
 三十六、
 三十七、
 三十八、
 三十九、
 四十、
 四十一、
 四十二、
 四十三、
 四十四、
 四十五、
 四十六、
 四十七、
 四十八、
 四十九、
 五十、
 五十一、
 五十二、
 五十三、
 五十四、
 五十五、
 五十六、
 五十七、
 五十八、
 五十九、
 六十、
 六十一、
 六十二、
 六十三、
 六十四、
 六十五、
 六十六、
 六十七、
 六十八、
 六十九、
 七十、
 七十一、
 七十二、
 七十三、
 七十四、
 七十五、
 七十六、
 七十七、
 七十八、
 七十九、
 八十、
 八十一、
 八十二、
 八十三、
 八十四、
 八十五、
 八十六、
 八十七、
 八十八、
 八十九、
 九十、
 九十一、
 九十二、
 九十三、
 九十四、
 九十五、
 九十六、
 九十七、
 九十八、
 九十九、
 百、

偏向東の史向東教聲、能く後述中透し柳柳是門
 慮世陽英答と路通想宜生米米常之溪而過去
 生身物傳多與旨和稱所保求安計心園書

准同人 大原 積雲

三諸乃神名備山尔五百枝刺繁生有都賀乃樹乃你继嗣尔
 玉著地事無在管裳不止將通明日香能舊京師者山高三
 河登保志呂之春日者山四見容之秋夜者河四清之且雲二
 多頭羽礼夕露丹河津者驟每見史耳如泣古思者

准同人 加藤 紫水

是明也水漢河必武帝 權種在眼中 織小機也夜月
 石舞舞 甲勁種 波 澤 若 使 雲 惠 夜 冷 運
 房 隆 物 和 開 雲 極 王 確 鳥 道 江 流 地 一 運 翁

准同人 菅原 聖雪

長增書巨寶修 樓 樓 未 真 懷 子 自 由 東 海 德 波 老
 散 西 湖 金 首 十 子 游 廣 漢 舊 書 畫 題 新 自 懸
 憶 書 小 影 自 以 史 更 秋 色 一 筆 法 無 人 生 載 亦 常 亦

准同人 若生 克象

風勁南弓鳴將 軍獵渭城州枯鷹眼
 疾靈盡馬蹄輕 忽過新豐市還蹄細
 柳管迴看射雕處 千里暮雲平

准同人 日野 象風

崇父替年曾漢耳 解中心自台高士牛生煙火氣
 不需作伴白石山 歎水湘把落神堪比肩瞻然不澤
 法淨祥香遠益 隨說意蓮吾次携移之贈水仙香

准同人 和泉 秀華

傳客來遊雲外巖神龍棲若洞
中淵雪如孤素煙如柄白扇
懸東海天 石川丈二詩富志派美書

準特選 南谷 滋美

書陸收宿懷星晨里陰潤畫常
新多法沙羨雅老風李仲
探素形坦園博物館藏

準特選 邊見 芳象

霜月曉花啼柳冷營夢似石枕刻相思
水紅從笑頰起背燈後薄衣倩郎收
蟬翅銀鈴撒青灰宮作天長字塔燈
今見高聲草根根開鬼語佛牙帶
淮楚德仁閣對大道音時合發場

新人賞 齋藤 俊哉

漢國山河在秦陵草樹深
暮雲千里色無處不傷心

新人賞 鈴木 哲夫

得時無忘

新人賞 眞壁 宏

山勢西來勢江波苦寒萬家
深橋裡伊少是書滿城

【学生部】

松下問童子言師採藥去
只在此山中雲深不知處

書の光賞 相田 早智

準特選 稲葉 福音

清晨又言寺初照高林外
房在果深丈悅喜信潭影
萬經類此俱唯唯聞鐘聲

準特選 須藤 七実

意陽乃樂處歌舞白銅鞮
江城四遠人花月使人迷



《教育部》
大賞を受賞して

あけほの支部 嶋崎 美嶺

この度は、宮城野書道展大賞という大変素晴らしい賞を頂き本当にありがとうございます。
先生に私が受賞したと伺ったとき「大賞」を受賞できる実力があると自分自身思っていなかったので驚きとともに嬉しさが込み上げてきました。また、大賞に選んでいただけただけなこと、とても喜ばしい限りです。
今までご指導くださった渡辺無象先生に深く感謝申し上げます。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

高嶺
美嶺

宮城野書道展大賞 嶋崎 美嶺

読売新聞社賞 小原 奏音

師範会賞 三嶋ことみ

河北新報社賞 雪田 友里

書の光賞 宮崎 紗良

書の光賞 中村 こい

宮城県知事賞 海老沼 和

準特選 佐藤 珠衣

高嶺
和
高嶺
珠衣

宮城県芸術協会賞 高橋 大馳

秀作 菊地 伯

高嶺
大馳
高嶺
伯

師範会賞 増子 結彩

秀作 千葉 絢音

高嶺
結彩
高嶺
絢音

書の光賞 清野 心花

秀作 千葉 詩月

高嶺
心花
高嶺
詩月

準特選 岩沢 雫

秀作 長尾 未来

高嶺
雫
高嶺
未来

準特選 佐藤 可菜

仙台市長賞 佐藤 翔哉

高嶺
可菜
天地
翔哉

天地
奏音

星雲
こころみ

大空
友里

平和
紗良

七夕
こい

書の光賞 阿部 美咲

書の光賞 矢野 友梨

書の光賞 増子 伶蘭

準特選 小嶋 芽衣

準特選 杉田 礼

天地
美咲

星雲
友梨

大空
伶蘭

平和
芽衣

七夕
礼

書の光賞 佐藤 睦

準特選 熊谷 圭悟

準特選 大森 開翔

準特選 高橋 寛佑

秀作 雪田 武史

天地
睦

星雲
圭悟

大空
開翔

平和
寛佑

七夕
武史

準特選 伊藤 碧衣

準特選 小池 姫愛

準特選 長谷川未羽

秀作 伊藤 朔

書の光賞 中野 葉瑠

天地
碧衣

星雲
姫愛

大空
未羽

平和
朔

うみ
葉瑠

準特選 高橋 圭美

秀作 岡安 柚香

秀作 大沼 祐希

秀作 菊地かなな

秀作 菅原 彩愛

天地
圭美

星雲
柚香

大空
祐希

平和
かなな

うみ
彩愛

準特選 針生 姬光

秀作 佐々木志優

秀作 金子まつり

秀作 佐々木健人

書の光賞 伊東 もと

天地
姫光

星雲
志優

大空
まつり

平和
健人

いけ
もと

準特選 森 栞菜子

秀作 宮内利佳子

師範会賞 志岐 蔵馬

秀作 橋本 和香

秀作 大場 希樹

天地
栞菜子

星雲
利佳子

平和
蔵馬

平和
和香

いけ
希樹

何れの処よりか秋風至り 蕭蕭として雁群を送る 朝来 庭樹に入り 孤客 最も先に聞く

何れの処よりか秋風至り
蕭蕭として雁群を送る
朝来庭樹に入り
孤客最も先に聞く

《大意》秋風は、どこから来るのであろうか。さびしい音をたてながら、雁の群を送って来る。今朝がた、その秋風が庭の木に吹きいったのを、ただでさえ心をいたませている孤独な旅人、この私は、誰よりもさきに聞きつけた。(劉禹錫詩・秋風引)

清夜群動息み 高居俗気無し

清夜群動息み 高居俗気無し
清夜群動息み 高居俗気無し

《大意》清く澄みわたる夜にはあらゆる活動するものが終息するが、超然たる塵外の居には少しの俗気もない。

読み 笑って謝す桃源の人(にこやかに、この桃源郷の人に別れを告げて言う)

笑 謝 桃
源 人

佐藤象雲書

第八画横画はやや右上がり短めにす
ることによって右払いを引き立てる

サンズイ各点の位置取りに留意。
旁は中心を整えて整正に。

横拵がりになり易い字。中央の「身」を引き締める。

第一画の払う方向角度と
第二画の起筆位置に注意。

偏旁の組み込み方を工夫する。
旁は筆順に気を付けて左右照応させる。

一般部規定課題出品について
規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

源人笑
笑謝桃

源人笑
笑謝桃

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

来花
覲紅復

源人笑
笑謝桃

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

	突き抜けて天上の紺	支部
		順位
		氏名
曼珠沙華		

山口誓子

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

ソクタイキンソウ
ハイカイセンチョウ

略解

衣冠束帯した人は容儀を整え威厳を保ち
行きつ戻りつ前後をながめ顧みるよう